
黒鷲と呼ばれた少年

リード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒鷲と呼ばれた少年

【Nコード】

N67910

【作者名】

リード

【あらすじ】

A・T界で東日本最速のライダー“黒鷲”の二つ名を持つ。とある怪異の血を引く一族の末裔が小烏丸と出会い。それをきっかけに暴風族と一緒に広い空を風と共に駆け抜ける物語。

主人公の少年は作者の別小説の主人公の弟です。が、別にそれを読まなくても全然読めます。

作者の更新は不定期です。

一話 “黒鷲” の名を持つ “鬼” の少年 (前書き)

初めての男の主人公ですが頑張ります。

一話 “黒鷲”の名を持つ“鬼”の少年

SIDE：主人公

俺の名前は御剣鷹臣^{みつるぎたかおみ}。東雲東中学二年。東中ガンズにも夜王にも所属していない、普通の中学生だ。

エラ・トレック
A・T持ってるけどグループに入るのも暴風族^{チーム}に入るのも正直めんどくさいし、人づきあいが苦手で嫌いだから一人で飛んでいるライダー……

クラスでさわいでる奴を見てもなにも興味がわかない、つまらない、学校に通っているのも義務教育だし、姉さんの遺言があるからにすぎない。
それにしてもああ、めんどくさい。

折原がなんか言ってるけど無視して自主休校^{サボる}。

空を見上げる。ムカつくくらいの青天。自分の矮小さを知るようで嫌になる。

ポケットに入れていたキセルに煙草をつめ火をつける。口に広がるのは苦い味。煙る紫煙。

今日は隣のクラスの南^{トッソ}が頭のガンズで縄張り争いがあるらしいけど興味なし。

さっさと帰ることにする。

バカでかい家。もう御剣の人間は俺と祖父^{いじい}しか住んでない。武家屋敷の様な家。昔、祖父^{いじい}に文字通り“鬼”のようにしごかれた道場も敷地内にある。

鞆を家令の時和ときわに渡し、部屋に渡り廊下を伝って移動する。移動する間に、キセルの中身を携帯灰皿に出してから元の場所にもどす。

そうして、到着した部屋で仏壇の中の姉さんの遺影に手を合わせる。

祖父じい以外で俺を守ってくれた唯一の最愛姉。コンクリが割れる俺の馬鹿力を恐れずに俺を愛してくれたヒト。無駄に人間離れた強靱さと回復力を持つ俺を『怪物』と言わずに愛して守ってくれた人。

祖父じいと姉さんがいなければ俺は『怪物』として生きていくようだったかもしれない。俺に制御の仕方を教えてくれた祖父じい。俺に両親からもらえなかった愛を惜しみなく与えてくれた最愛燕姉さんの人。

姉さんは、

俺を庇って逝ってしまった。

俺のせいで逝ってしまった。

俺は、包丁だつて刺さらないし、切れた傷もすぐにふさがるくらい頑丈なのに、なんで庇ったんだろう。姉さんは俺のせいで轢かれて死んでしまった。

感傷に浸っていると、

「また、そうやっているのかい？」

またか、何時の間に入ったんだこいつ。

人の家の庭に入っている燃え頭に振り返らずに声を投げかける。

「・・・何の用だ」

人の家に勝手に入ってくる時は玄関から入れ、挨拶をしるとか言い
たいことは山ほどあるがまずはコレだろう。

「・・・夜の散歩の誘いにね。君の事を話したら“渡り鳥”^{ツバメ}に頼ま
れてね」

勝手に人の事を話すな。俺の気持ちは尊重されないのか？

「悪いが、興味がない」

一度も視線を移さずに、“炎の王”^{スビット・ファイア}に告げる。

「さっさと帰れ」

「^{シュヴァルト・アードラー}“黒鷲”。いや、鷹臣君。先に謝っておくよ、ごめん！」

「はあ！？いきなり何言ってたんだスビット！！」

流石に聞き捨てならないことがあったので炎の王の方を振り向くと、
そこには薄桃^{ヒメク}の髪をした女の姿がいた。
ためえ、何、人ん家に“創世神”^{ジェネシス}の頭^{トツプ}、連れてきてんだああああ
あ！！

^{スビット・ファイア}
SIDE・炎の王

今、僕の前には凄い怖い光景が広がっている。鷹臣君に笑顔で抱き
ついているシムカと、僕の方を青筋を浮かべて睨みつけてくる鷹臣
君。

鷹臣君、男には容赦ないけど女の子は手荒に扱えないし殴れないからか、体を硬直させて、凄まじく我慢しているのが見て取れる。

でも、小声で、スピットてめえ後で覚えてるよって言うのはやめて欲しい。君、コンクリート素手で砕けるし、表札抜いて投げられるじゃないか。目が殺気に満ちているよ。

シムカが、東日本最速を謳われる“シュヴァルト・アードラー 黒鷲”に興味を持っていたことと、僕がシュヴァルト・アードラー黒鷲もとい鷹臣君と友人関係にあることが知れたからこの状況になってしまったわけだが……。正直僕は生きている気がしない。

「ねえ、シュヴァア君。君はジエネシス創世神に入る気はない？」

シムカが鷹臣君に尋ねる。

「俺は、今はこのチームにも入る気が無いです」

シムカの胸が当たってるからか耳をつつすら赤くして、しかししっかりとした声で言った。

「俺は、正直に言うと今はチーム自体に興味が無いです。ただ、自由に空を翔れればそれでいい」

そう言うと、そっとシムカの肩を掴んで身体から遠ざけた。

「ですから、お引き取りください」

静かだが、相手シムカに有無を言わせない不思議な力があつた。

「あと、スピットは少し残れよ」

あー、やっぱり怒ってた？

SIDE：鷹臣

「しょうがないから今日はひいてあげる」

と言ったシムカさんを見送ってから

諸悪の根源であるスピットに向き直る。

「んで、スピット。何のようだ？」

俺は今、素晴らしい笑顔を見せているだろう。この笑顔は姉さん譲りのものらしい。姉さんの友人でもあり“鬼”の血を引いているらしい御剣の人間の面倒を見てくれた忍野おしのさんには、クールちゃんそっくりだねえという評価というか言葉を頂いた。

ほっとけ。

本気でほっといてくれ。

「“黒鷲”^俺を“渡り鳥”^{ツバメ}に逢わせることだけが目的じゃねえだろ」

正直に答えなかったら家から叩きだすぞ、と言うと驚いた表情をしていた。

俺に殴られると思ってたんだろか……。果てしなく複雑な気分になった。

本当に殴ってやろうかこの燃え頭が

一話 “黒鷲” の名を持つ “鬼” の少年（後書き）

これからも頑張ります。

誤字脱字などありましたら教えてください。

二話 姉の友人、弟の犬猿の仲（前書き）

いろいろ捏造しまくり。

A T 持つてるのに A T で空を飛んでもバトルしてもいない。
とりあえず、こつこつ更新頑張ります。

二話 姉の友人、弟の犬猿の仲

S I D E : 鷹臣

スピットに聞いた話は創造神ジェネシスが新しい“風の王”を創り出そうとしていて俺と同じ学校の奴が候補に挙げられているらしい。

正直、それで俺をチームに入れようとしたのかと納得した。見張り役にしようとしたのだろう。

夜ずっと話をして寝不足で学校を休んだ、何日かした後、折原から電話がかかってきた。めんどくさいけど成績のために学校に向かったら校門の所に髑髏スカルセイターズ十字軍がいた。

校舎なかに入ってから、大人しそうな眼鏡を捕まえて聞くとベビーフェイス、もとい東中ガンズが負けたらしい。

南樹ベビーフェイスは、ハブられている。同じクラスだからか、嫌でも目に入っすっげーうぜえ。

よそでやれ。そう思った。表で支配しているガンズにも、影で学校を支配している夜王にも興味が無いが、ドクロの軍団はうざい、というよりも目障りだ。ハブってるやつらめんどくさいけど・・・

そいつらのうざったい空気の漂うこの空間にはいたくなかった。よし、帰ろう。

そうと決めたらうざい集団クラスにいたくなくて、音を立ててイスから立

ち上がった。授業中に立ちあがった俺に視界が集まったが無視。

「先生。この空間がうざいので帰ります」

空気が凍った。先生も凍っている。

静かなのをいいことにさっさと荷物をまとめて立ち上がる。

鞆を持って教室のドアを開ける。

視線が集中するが無視。

「っおい!!」

さっさと出ようとしたら金髪でニット帽をかぶった、あ、えーと興味無いから覚えてねーや。なんかうっすいーのに声をかけられた。

「・・・何？」

めんどくさいなあ、と思って睨む。俺はとつと帰りたいたんだ。

いつの間にか黙りこくった教室を見渡す。

本気でめんどくさいな・・・

「用が無いんなら、俺は帰る。こんな胸糞悪い場所になんかいたくなえし」

誰が姦しいくすくす笑いとかが充満した、空気の悪い教室にいなければならないのだろうか

「それに、自分達のせいでもあるのにたった一人のせいになっている

ような場所にはいたくねエよ」

くすつ、と笑って、言い捨てた。

いつの間にか、目の前に来てたうつすいの顔色が変わる。

それが面白くてなおクスクス笑いながら、凶星かよ臆病者、と言いつ捨てた。

今度こそ、完璧に固まったうつすいのと教室を尻目に教室を出た。

俺が出ていった教室で、なんだよあいつ・・・とか、人でなしとか、何も知らない癖にとか、一匹狼がとか、吐き捨てるようなささやきが聞こえたけど、何の感情も浮かばなかった。

友達と認めた奴を見捨てるような奴よりましだし、人でなし？だって俺先祖がえりて完璧に鬼らしいから人じゃないしね、何も知らない？何があったのか知っててこんなことしてる奴らよりはましだろう？、一匹狼？それがどうした。どろどろして煩わしい関係が絡むのなら一人の方が楽だよ。

嗚呼、何て面倒な場所だろう。

つらつらとそんな事を考えながら家に帰る。

制服から私服に着替えてA・Tの部品見パツに行くのもいいし、着物に着替えてお茶を飲みに行くのもいいな・・・。俺の学校生活については爺は文句いわねエーし。久しぶりに二条に会いに行くのもいいかもしれない・・・。姉さんの墓参りもしなくちゃな

A・Tで翔るにはもってこいの青い空を見ながらそう思った。

S I D E : 海 人

旧友の墓参りに行くとそこにはいけすかねえ旧友の弟がいた。

向こうも俺に気付いたのか、姉に似た相貌を歪ませた。

気に喰わねえ、そのあいつと同じの青みを帯びた黒い髪も意志の強い琥珀色の瞳もあいつの顔にそっくりな顔も何もかもが気に喰わない。

「お久しぶりです。・・・俺としては会いたく無かったですけど」

けっ、俺もテメエと同じ気持ちだよウンコクスが！！

「・・・たぶん、俺も同じ気持ちですけどここでは争いたくありません。姉さんが眠ってますから」

「まあ、な」

紫煙をくゆらせる。

ただ、沈黙が広がる。

嫌な沈黙ではなく、自身に共通する故人の思い出に浸るがゆえの沈黙。

お互いにとってその立ち位置は違えど大切だった人間に対する哀悼。

「あの、貴方は」

サアアアと風が俺達の間を通り抜けていく。

まるで、その言葉を口に出すことなぞ許さないと云うように

「さあな、昔の想いだ。もう、告げることはねえことだろう」

そう言っつて踵を返した。

あいつに似たあの双眸は嫌いだった。

もういないあいつの事を嫌でも思い出させてくれるから。

「鷹臣」

「、なんですか？」

俺に名前を呼ばれた事に度肝を抜かれたようだ。まだ、青い。あいつなら、たいして顔に表さず返答してくる場面だけど。

「首輪と手綱はしっかり付けとけ。自分に噛みつかれるなんざ、笑い話にもなりやしねえ」

いつもの冷静な面がぎよつとしたように歪む。

なぜ、と口が音無く動いたのが見えた。

それに思わず口角が上がる。

「あいつに聞いたんだよ。お前の体質。マイ・セット俺の弟と似たようなもんだ
がお前の方が厄介なようだな」

「な、んで。姉さんがあんたなんかに　　！？」

「親友、だったからな」

頼まれたんだよ。

それを聞いた奴は顔を歪め、こちらを憎らしげに睨みつけた。

ああ、やっぱりこいつは嫌いだ。

燕に頼まれたことがあったから、声をかけたけど、大っ嫌いだったことを再認識しただけか。

それだけを告げ、今度こそ踵を返して歩き出した。

後ろはもう振り返らなかつた。

二話 姉の友人、弟の犬猿の仲（後書き）

弟の二重人格フラグ。

次回あたりにしっかりと説明したいです。

頑張ります。

三話 コインの裏表（前書き）

この話から若干戯言シリーズと混合し始めます。

死んでいるキャラが生きてたりとかします。（零崎一賊とか・・・）
出てくるキャラクターの言葉使いとか間違ってたりましたら教えてください。
ください。

お願いします。

三話 コインの裏表

SIDE：鷹臣

余計な事を・・・

最愛の姉に向かって思わずつぶやいた。

姉が俺の心配をしてくれていたことは嬉しい、けど

「あの人は俺の事が嫌いなのに・・・」

姉さんが俺の事を庇って死んでから、あの人は俺を嫌って真正面から俺を見ない。

あの人は、姉さんの事を好いていた。・・・姉さんは気付いていなかったけど。

親愛か友愛か恋情なのかは分からなかったけど、あの人が姉さんの事を愛していたことには違いない。

二人は中学が一緒に自他共に認める“親友”だった。姉さんがあの人にとって大切なひとであったのは間違いない。

その関係を、姉さんを死なせてしまった俺のせいで壊されてしまった。

俺の事を嫌いなのも自分がよおく分かっている。

あの人には俺を恨む理由も嫌う理由もあるのだから。

そんな相手に“鷹継”のことを教えるなんて・・・、過ぎたことだけれど思い切り歯噛みをした。

「頭が痛い……」

しかも、ストームライダー暴風族にとって天敵とも言える 風の局長だ。

そんな人間に弱みを握られるなんて、な……。想像してもいない、んなこと。

ずるずると墓の前に座り込む。

『ぎゃはは！！んなぁーに、悩んでんだよ主様！！』

「鷹継……」

頭が痛い原因はそれ以外のものだったら、他でもなくもたかつくう一人の俺だろう。

俺達の間には優劣はなく、コインの裏表の様に正反対。

区別をつけるとしたら、鷹継の方が戦闘（というよりは殺戮か）が得意で俺の方が作戦（エツグイ戦略と策略の間違いだろ、と言われたが）を立てるのが得意だという所か……

優劣はないくせに、俺の方が鷹継よりも力の順序は上という訳分かんらんアンバランスさ……

ソレについて過去に聞いたら、

『オレの主様なんだからいいんだよ！！』

らしい……。わけわからん。

それよりも、と鷹継。

『可愛い弟に相談してみろよ、お兄様！！』

ぎゃはは、と笑う気配がした。

「兄は、可愛い弟君に心配かけたくなえから、言わねえよ」

『そーかよ』

つまらなそうな声がした。

あー、もうだりい。

「鷹継」

『なんだよ、主様』

「今日は好きにしていぞ。もう、疲れたから奥で寝る。騒ぎを起こさねえんだったら、好きにしろ」

勝手にあの闇突にでも、橙にでも会いに行きやがれ、そうぼやくと

『マジ?!』

「マジだ」

そうして、俺と鷹継は入れ替わった。

・・・俺だって、人にあそこまで真っ直ぐな悪意を投げかけられて

普通でいられるほど精神面メンタルが強いわけじゃねえんだよ。

SIDE：鷹継

「ぎゃはは！！ちょー、楽しいぜえ！！」

ジャッと壁とATのホイールが擦りあって音を立て、摩擦面からは火花が散った。

頬をかすめるのは砕かれたナニカの欠片。すれすれに避ける。

僅かにかすめた耳元がじんわりと熱くなり、相当の速さで飛んでいるのが分かる。

受けたら致命傷な攻撃をかわしながら。次々と交わす言葉の応酬。

大けがをするかもしれないような状況でも、それすらも楽しく感じる。

主様もといお兄様の性格いや性質もエグイけど、オレも大概だ。

「げらげらげら！！僕様もだぞ、つーちゃん！！」

笑う姿がチャーミング。綺麗な橙の瞳を煌めかせる。

橙色の髪を注連縄の様にぶつとい三つ編みにして、獣の様なしなやかさと美しさをその幼い容姿と体躯に押し込めたような少女は舞い踊る。

「なんで、オレの拳でコワレナイんだよ？！」

オレも可笑しいけど、テメエも大概だぜ！！まーちゃんよお！！

ぎやははと笑いながら吠えた。

アドレナリンが凄まじい速さで分泌される。魂が高ぶる。精神が研ぎ澄まされていく。

「それはこっちのセリフだぞ、つーちゃん!!」

壊れてもすぐに治るって人間のレベルじゃねーぞ!!

げらげらと笑う。

お互いに吠える。思いのたけをありったけ籠めて咆哮する。

「くくぞおおおおお!!」

その日、都内某所にある山の中の資材置き場が崩壊した。

SIDE：真心

正座させられた。

目つきが怖くなっているおーちゃんに。

「……何か言うことは？」

いつもは優しそくに光る琥珀色の瞳が冷たい光を宿して俺様を見る。極寒の地にいるようだと言ふと内心、動揺した。

「ごめん、」

こういう時のおーちゃんは怒らせない方がいい。
昔からの付き合いでソレはよく知ってる。

おーちゃんは一人の人間である前に一匹の“鬼”だから、
俺様の様に人為的に作られたわけではなく、自然に生まれおちた“
”。

つーちゃんが戦闘面を担当してるけど、おーちゃんが弱いわけじゃない。
むしろ、本気でキレた時のおーちゃんのほうがつーちゃんより強い
ぐらいだ。

ハアとおーちゃんは溜息をついた。

「わかった。後で鷹^{愚弟}継にも話を聞いとく、また遊んで崩壊させたんだろ？」

その言葉にこくと頷く。
優しく頭をなでられた。

「じゃあ、潤さんにも宜しく言っといてくれ」

そう、呟いた言葉は、おーちゃんの気持ちが一カたたくさんに籠められた言葉で、ムカついた。

「おーちゃんのバーカ!!」

「っおい!!」

怒鳴るおーちゃんを尻目に俺様は用意されていた車に飛び乗った。

女心を知らないおーちゃんなんて潤に振られちまえ。

そう、思った。

三話 コインの裏表（後書き）

鷹臣は自分の二重人格である鷹継を自分の弟として認識しています。最初に鷹継を見つけ名前を与えたのも彼、認め認識したのも彼です。精神の序列としては本来の身体の持ち主である鷹臣のほうが上位人格になり、本来の身体の持ち主ではない鷹継が下位人格にあります。だから、自分が鷹継である時の記憶や想いかなんかも覗けたり知ることができるけど彼は絶対にソレを行いません。しかし、鷹継に見てくれと頼まれた時や一定以上の感情が爆発した時は嫌でもソレを知ってしまいます。鷹継の場合は本気で知られたくないことはどうにかしたらどうにかすることができるのでそれが読めなければいいか、と思っています。

御剣家は祖先である“鬼”の血を濃く引く子孫に二重人格者が生まれる家系であり、鷹臣は持って生まれた人格（鷹継）を認められ、血を濃く引きながらも多人格を持たなかった姉・燕を差し置いて御剣の跡取りとなった。という裏設定があります。

応援ありがとうございます。頑張りますね！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6791o/>

黒鷲と呼ばれた少年

2011年10月7日03時51分発行